

フランス文化を学ぶことを学ぶためのコーディネイト ー共同ブログ FRENCH BLOOM NET の試み

釣 馨

Université de Kobe
QYI02471?nifty.ne.jp

FRENCH BLOOM NET-main blog <http://frenchbloom.seesaa.net/>

FRENCH BLOOM NET-INFO BASE <http://cyberbloom.seesaa.net/>

現在、2本立てでフランス関連情報サイト(ブログ形式)、FRENCH BLOOM NETを運営中である。通常ブログは個人が日記のように記事を書くが、FRENCH BLOOM NETは複数のメンバーで運営し、週4、5回のペースで更新している。投稿者の延べ数は30名以上で、書き手の中心はフランス語教師だが、投稿者には学生、社会人など、教師以外の投稿も含まれる。main blogはライターに自由なテーマと形式で書いてもらい、ライター別に記事を分類している。INFOBASEではmain blogの記事を関心に応じて読めるようにジャンル別に再分類し、加えて「週刊フランス情報」と題して、1週間に起こったフランス関連のニュースを紹介している。ブログのテーマは政治、経済、映画、音楽、書評、ファッション、スポーツ、料理など多岐に渡っている。(興味をもってくださった方はぜひご連絡ください)

2005年4月にFRENCH BLOOM NETを始めたとき、ブログを知っている学生は少数派だった。それから3年が経過したが、今やブログを知らない学生は皆無で、日常的にブログを読んだり、自分でブログをやっている学生も多い。総務省の発表によれば、2006年3月末の時点で、日本でのブログ利用者数は2,539万人に達しており、また、2006年第4四半期の世界のブログ投稿数の37%が日本語によるもので、事実上の世界標準語である英語や、母語人口で世界最多の中国語を抑えての1位であったというデータもある(ブログ検索サービス、米テクノラティ)。ここ数年の間にブログは様々な問題をはらみながらも、不可欠な情報発信媒体として日本に確実に浸透した感がある。

ブログを始めたときは、この媒体が何か大きな変化をもたらすかもしれない、という直感だけがあったのだが、ようやくその変化の本質が見えてきた。

ミシェル・ド・セルトーは1968年の5月革命論『文化の政治学』（山田登世子訳、岩波書店、1990年）の中で、「文化と社会の関係が変化したのである。もはや文化は一階層のためにとっておかれるものではない。文化はもはや固定せず、万人によって受け止められるコードによって規定されている」（p.112）と述べている。大学の研究や教育に関しても、大学の教師たちはその変化に気がつかず、「自分たちのモデル(かつて文化であったがすでに文化でないもの)を維持しようとしている」（p.115）と。そして、大学は学生の「さまざまな疑問や欲求にあわせて方法を変えながらマスカルチャーを生産する研究所」（p.113）に変わる必要があると提言までしている。5月革命の直後の発言である。これが具体的な形で理解されるためには、ウェブ社会の到来を待たなければならなかったのだろう。

西垣通は『ウェブ社会をどう生きるか』（岩波新書、2007年）で従来の「教え込み型教育」を批判し、それに生物情報学をモデルにした「しみ込み型教育」を対置している。「教え込み型教育」とは、言語化された明示的な知識体系が前提となっていて、それらを細かい要素に分解し、綿密なカリキュラムにしたがって学習者の頭脳に注入していく教育である。まさに従来の大学教育のモデルであり、既存の専門知は「言語化された明示的な知識体系」を縦割り形式で構築し、「教え込み型」教育の前提を作ってきた。

一方で、「しみ込み型教育」は、生物が環境とコミュニケーションしながら生きているように、情報の大海の中で、「今この時間に自分が生きる上でもっとも重要なものを拾い出す能力」にかかわる。このようなモデルが必要なのは、最初に注入されるべき知識体系があるのではなく、個人が置かれた生の条件や文脈の多様性が出発点になるからである。ここでの教育の役割は無知な学生を啓蒙することではなく、セルトーが言うように個々の条件のもとで「さまざまな疑問や欲求を持つ」学生と、彼らを取り巻く情報環境のあいだを取り持つようなコーディネーター的なものである。

私たちは今の社会を生きていくために、常に新しい知識やテクノロジーを獲得し、同時にその獲得したものによって自分を再帰的に捕らえながら、自分を組み替えていくことが求められる。新しいテクノロジーは、新しい現実を出現させ、私たちは「先に学んでいたやり方の全体」を批判の対象にしながら、学び方を組み替えていくことが要請される。個人の日常に根ざし、個人の置かれた条件によって方法が異なり、またその都度組み変わるような学びなのだ。そういう「学ぶことを学ぶ」プロセスを私たちは日常的に繰り返している。今の学生の教養のなさを嘆く声が未だに聞かれるが、教養は「大きな物語」が機能し、人々が共通の価値観を持ちえた時代の約束事と言える。それは西洋のブルジョワ文化を高尚なものとしておしいただく文化モデル、「文化とは何か」をあらかじめ定義され、序列化された文化モデルの産物である。

日本が鎖国を解いたとき、フランスは近代的文化先進国で、日本と文化的な格差が著しかった。もちろん、この格差は近代化という尺度においてのことである。フランスから伝えられる情報は少なくかつ貴重であり、一部の人間にそれが集中していた。また、その情報の処理(主に書籍の翻訳)には時間とコストがかかった。それゆえにそれらは特権的な媒介者によってトップダウン形式で伝達され、人々がそれを受動的に享受するというモデルに合理性があったと言える。

以前はフランスに行ける人間は稀だったが、今は安い航空運賃で誰もが気軽に行けるようになった。以前は文化的格差ゆえ、フランス文化に過剰な憧れがあり、追いかけるべき思想的課題があったが、今はフランスと日本で娯楽から食文化に至る日常的な習慣が共有され、グローバル化によって引き起こされる同じような社会的な問題に直面している。またメディアの発達によって、書籍＝文字以上に、音声や映像が迅速な理解の媒体になっていることも忘れてはならない。文学や芸術だけが特権的な情報でなくなり、幅広い領域でフランスと日本は相互的に情報を交換するようになっていく。

ところで、フランス本国はどうなのかというと、去年の12月に雑誌『タイム』(ヨーロッパ版、2008年12月3日)に「フランス文化の死」というセンセーショナルな記事が載った。この手の議論は今に始まったことではないが、フランスの多くのメディアがこぞって取り上げ、かなりの衝撃をフランスにもたらしたようだ(ブログでも紹介したが、高いアクセスを記録)。それに反論して、アカデミー会員が『フィガロ』(2008年12月4日)に、「いや、フランス文化は死んでない！」と題した記事を書いた。また同特集には、いかに世界的に活躍しているフランス人が多いか列挙されていたが、それは世界的に成功しているフランス人はグローバル化に適応力があることを逆証明しているかのようだった。一方で、この記事はよく読むとそれなりに説得力のあることも言っており、今の文化のあり方や、国と文化の関係を考える上で非常に興味深い議論であった。

記事ではフランスが文化保護のために補助金を惜しまないことが甘えを生み、逆に文化的な活力を奪っていることが問題視されていた。今もそのような政策を文化国の証として賞賛する声もある。しかし、フランスがそのような政策をとっているにもかかわらず、同時代の文化的影響力に関して言えば、日本の方が上なのだ。かつて私たちがフランスの文学や芸術に魅了されたのと同じように、今はフランスの若者が日本のサブカルチャーの虜になっている。文学をアニメやロックと一緒にするなという声も聞えそうだが、現在、文化的な活力に満ちているのは明らかに市場原理の世界をしたたかに生き抜くサブカルチャーである。

また、日本におけるフランス文化の価値の相対的な低下は、ハイカルチャーの危機と直接つながっている。例えば、かつて文化研究の特権的な対象であった文学は、今や一部の好事家によって支持されるサブカルチャーになりつつある。つまり、同時代の文学と同じように、批評や研究もシビアな市場原理に揉まれながら(市場原理という聞こえが悪いが、つまりは一般の人々へのアピールと支持をとりつける必要性)、サブカルチャーとして生き残るしかなくなっている。この問題に関しては岡田暁生著『西洋音楽史』(中公新書、2005年)に示唆を受けたが、クラシックや現代音楽の領域でも同じことが言えるようだ。

一方で、フランス文化はかつての権威を失ったかもしれないが、一方で過去のフランスから解放されることで、活力を得ている。例えば、フランス映画は、今や現代的な想像力に満ちていて、とっつきやすくなり、「ヌーボーロマン・コンプレックス」に囚われていたフランスの小説も次第に「今とここ」に焦点を当て始めている。また、フランスの野心的なマイノリティーはあらゆる分野で文化にコミットし、フランスは多民族文化の市場として、フランスの国内外からアートや音楽や文学がもたらされて

いる。フランスの慣習的な考え方によれば、フランス文化は凋落したのかもしれないが、周辺の文化の隆盛を支持するとき、フランスは文化的な勢力として再評価されるだろうと『タイム』は締めくくっていた。

このようにフランス文化は多様化の一途をたどっているが、この状況がフランスに対して明快なイメージを抱くことを困難にしているのかもしれない。学生のアンケートみてもそれが伺える。以前は作品であれ、商品であれ、フランス発であることがはっきりわかった。しかし、今の状況では、フランス語を学びながらフランスについて知りたいと思っても、フランスに自分の関心をなかなか結びつけられない。フランス語の学習意欲はテクニカルな問題よりも、結局は、いかにフランスに対する関心を高め、モチベーションを維持するかにかかっているが、関心を高めるとは、その国が発している情報に積極的にアクセスし、「自分なりの意味や価値を見つけていくこと」に他ならない。そのためには情報がある程度整理され、理解の橋渡しをしてくれるようなプラットフォームが必要になるだろう。

現在、情報へのアクセスには検索エンジンが不可欠である。もちろん、本が依然として体系的で構造的な情報源であることには変わりはない。しかし、今や多くの学生が本にたどりつくのは検索エンジンを通してなのだ。いわゆるロングテールの部分は、中身を見せ、情報化したほうが出版者、著者、読者の利益になるというコンセンサスが生まれ、出版社もアマゾンなどに協力を始めている。検索エンジンのナビゲートによって、本が売れるようになったという。これまでは自分の関心と本を結びつけることができなかった。

フランス文化に関心を持ちにくいのは、それが複雑化しているにもかかわらず、それが情報化されていないことにあるのだろう。フランス文化の権威にフリーライドできなくなったにせよ、フランスのブランド力はそれなりに保たれている。こういう情報ブログが可能なのはフランスだからこそなのだ。フランス文化は日本の各世代の価値観に明確な形で影響を及ぼしてきた。多くの人々が共有できるネタが蓄積され、世代間の交流にもなりえる。情報化するには格好の資源なのである。

だから徹底的に情報化すればよい。専門家や研究者と呼ばれる人たちの多くは、少し前まではウェブ全面否定派が多かったが、最近では「検索エンジンやウィキペディアは便利だが、ネット上にはろくな内容のものが無い」と譲歩し始めている。そう言うのならば、誤った知識や情報が流通しないように、専門家が情報ベースのようなものネット上に整備すればいい。専門知の特権を主張するばかりでなく、その成果をいかにウェブ上にわかりやすいように、使いやすいように流していく。そういうコーディネーターの役割がこれから専門家や研究者に求められるだろう。またウェブ上で自ら手本やモデルを示すこともまた「しみこみ型教育」に通じていく。

ITを駆使した高機能のツール、カジュアルなデジタル機器、また podcast や youtube や wikipedia のようなネット上のデータ資料が、無料または安価で利用できるようになったことの影響も大きい。それまで文化(およびその生産手段)は一部の特権的な人間に独占されていた。発信者と受信者、生産者と消費者は完全に分け隔てられ、しかも一方通行だった。しかし、今は両者の壁が低くなり、その気になれば誰でも発信が可能になった。また、テクノロジーはもはや私たちの仕事の能率を高め、生活を便利

にするというレベルのものではない。それは人間の根拠となっていた思考や判断と結びつき、人間のあり方をドラスティックに変えてしまっている。私たちはウェブという社会インフラから逃れられないと同時に、それらは私たちの現実感や日常を形作ってさえいる。

このような状況に対応する文化モデルとはどのようなものだろうか。私たちは芸術作品として公的な支持を得るような文化だけでなく、個々人の中で起こる意味生産にまで文化の概念を広げる必要がある。文化は個人が様々な情報と関係し、意味や価値を与えていくことで生まれる。この場合の情報とは、人間学的な観点から捉えられたもので、人間を行動や実践へと促し、新たな情報を発信するように作用する。重要なものは、情報の意味や価値は受け手の目的連関の中で生じるということだ。つまり、情報の作用は受け手の置かれた条件や文脈に依存する。そういう意味で、ブログという形式は非常に示唆的である。ブログとは個人が自分の関心や興味にもとづいて情報を選択・収集し、それを再編集する行為だが、まさに文化は個人の手によって無限に「再構築」されていくのだ。

これらのことを踏まえた上で FRENCH BLOOM NET がモデルにしているのは「多孔的な空間」である。多くの入り口があり、多くの出口がある。文学や芸術だけでなく、アニメやロック、経済やエコロジーなどがすべて等価な入り口として存在する。カテゴリーの整理よりも、縦横無尽にリンクを張ることを意図的にやっているが、リンクというウェブの象徴的なシステムはあちこちに穴を開けることなのだ。音楽や映画の情報を求めて訪れた読者が、隣にあった政治や経済の記事を読んで出て行くような隣接性、つまり、直接の関連はないがフランスというキーワードによって同じ場所に居合わせる関係も重要である。ときにはフランスからはずれ、脱線してもかまわない。過度に整理せず、つながりやひろがりを読者の関心にまかせるような作りである。

「教育的」であるためには学生の知的好奇心を高める必要がある。娯楽的な情報の中で戯れているだけでは意味がないという反論もあるだろう。そこで娯楽的な情報から知的な情報や思考への媒介が必要になるわけだが、それらには明確な区別はなく、サブカルチャーはその両面を備えている。娯乐的であっても知的な関心の入り口や起点になりえるし、知的な批判を加えることもできる。今の学生から知的な関心を引き出すにはサブカルチャー批評という形が最も有効であり、価値を共有し、議論を載せるためのこれ以上の媒体はない。

もちろん、これらはいくまで理念的な議論であり、これがそのまま実現されるわけではない。技術決定論の陥穽については十分に承知しているつもりであるが、今回はここで紙面が尽きてしまった。具体的な問題は次回に譲りたい。

■2008年4月のアクセス(訪問者数とページビュー)

FRENCH BLOOM NET-main blog 2955人-31470PV

FRENCH BLOOM NET-INFO BASE 4168人-38922PV

■2つのブログをあわせた1日の訪問者:500-700人、1日のページビュー:2000-3000PV、1日の検索エンジンからのアクセス:150-250件